

---

# とある魔術と刀鍛冶

亮士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術と刀鍛冶

### 【Nコード】

N7674M

### 【作者名】

亮士

### 【あらすじ】

学園都市に様々な事件が起きる中、それを解決する二人の少年がいた。

注）これはup主がかってにオリ主練り混ぜ込んだものです。

「設定」て大事だよね？（前書き）

まだ初心者ですが、頑張ります。

「設定」て大事だよね？

名前：水月 響 みづき きょう

身長：173 cm

体重：55 kg

能力：武器を呼びだす武器召喚 ウェポンマスター

好きな物：甘い物、読書、ゲーム、家事、

嫌いな物：辛い物、不審な奴、

学園都市に来たのは高校の入学する前。

身体検査でレベル0という結果にショックになった。

高校を入学して同じレベル0の上条当麻と一緒にクラスになり、仲良くなった。

上条からは響と呼ばれている。

首から下げている勾玉は祖父から貰った物である。

第一話　く日常から非日常へく（前書き）

疲れた

## 第一話　～日常から非日常へ～

夜の学園都市に2人の少年が走っていました。

「上条さん、俺たちなんでこんなことになったんだ」

「俺が知りたいわ」

訂正、2人の少年が不良たち追われていた。

「まちやがれこの野郎」

「ああもう、不幸だああああ」

俺たちは橋の所まで逃げて来た。

「あれえ、不良、どもは、どうなったんだ」

「そういえば全然追ってこなうな」

すると橋の向こうから人影がみえた。

「まったく、何やってんのよアンタたち。不良を守って善人気取りですか」

「まさか、ビリビリが全部片付けたとか」

「そうよ。あと私の名前は御坂美琴よ」

「ああ、わかったわかった」

彼女は学園都市でも七人しかいないレベル5であった。

「響、お前は寮に戻れ」

「けど上条、大丈夫か」

「心配はねえよ。俺にはこれがある」

と俺に右手を出した。

「そうか、なら遠慮なく」

俺は上条に任せここをあとにし、寮に戻った。

AM7:00

「あつっ！」

部屋の中は熱気であふれていた。

「クソ、エアコンが壊れてやがる」

とりあえず朝食を取ることにした。

「うまあ」

と携帯になる。

「水月ちゃん、バカだから補修です」

という子萌先生のラブコールを聞きつつ、俺は着替えることにした。  
隣から不幸少年の声が壁を突き破った。

「ぎゃ~~~~~」

「相変わらず上条は騒がしいな」

やれやれと思いながら玄関に出ようとしたとき、

「おっと、忘れるところだった」

テーブルの真ん中にある勾玉を首から下げ学校に行くことにした。

P M 0 : 0 0

上条は補修が長引くと言い、俺は一足早く戻ることにした。  
戻ってもやることが無いので、第七学区ふれあい広場にあるクレー  
プ屋に行くことにした。

「けっこう人がいるな」

それにやけに子供も多かった。

「ご注文は何にしますか？」

「チョコバナナクレープで」

数分もたたない内にクレープができた。



「おまたせしました」

「ん、このクレープ屋はおいしいな」

と感想を言いつつ突如、どこかで大きな爆破音が聞こえた。

「な、なんだ?!」

「皆さん、広場の中からでないで下さい」

ジャケットメント

風紀委員の紋章をつけた少女の声を聞き、俺は広場にいることにした。

「いない」

「どうかしたんですか。バスガイドのお姉さん」

「男の子が一人いないのです。さっきバスの中で忘れたものを取りにいったきりで」

「わかった。俺が探します」

「ありがとう。さっき三人の女の子たちが協力してさがしているわ」

と大声で叫んでいる男の声がした。

「なんだてめえ、離しやがれ」

「だめえ」

男と少女の間で何かもめている声が聞こえた。

「あ、男の子が」

「クソ、間に合うか」

俺はとっさにそこへ走った。

「てめえ、その子たちを離しやがれ」

男に拳を顔の頬にあてた。

「ぐはあ」

「大丈夫か」

「ありがとうございます」

「クソ、このまま引き下がるか」

男は車に乗り、エンジンをかけようとした瞬間

チュドーーーーー

「な、なんだ」

光線の元を見ると、そこに一人の少女がいた。

（ゲ、あいつはあの時のだ。ここはとんずらした方が良さそうだ）

「じゃ、俺はこれで」

「え、ちよつと待って下さい」

「これが待てれないんでね」

P M 4 : 0 0

（今日はいろんな事があって体がもたねえな。スーパー行つてとっ

とと帰るか)

「今日は特売日か」

とりあえず、必要な物を買って帰ることにした。

「えつと、卵、小麦粉、牛乳、肉類・・・あ、非常食のカップ麺買  
い忘れた。戻るの面倒いが、仕方ねーな」

夕日が地平線に沈みかけた頃、俺は来た道を戻ろうとする。

少し走り、俺はある異変に気づいた。

「ん？なんだ人が全然いないな」

辺りを見渡して、人がいないか確認した。

「誰もいないな」

この時間帯ならまだ人がいてもおかしくはないと考えた。  
すると、背後から足音の音が聞こえ振り向くと、

「なぜここに人がいるのだ。人払いのルーンの効果小さかったか」

黒衣の大男がいた。

「てめえ、誰だ」

「貴様に名乗るなどない。だが、貴様はここで死んでもらう」

## 第一話 日常から非日常へ（後書き）

作「疲れた」

響「おい、作者『疲れた』じゃねーつの。早く続きかけ」  
作「強引な奴だな」

## 第二話　く覚醒く（前書き）

誤字、脱字には気をつけて

## 第二話　く覚醒く

「くそ、何だつてんだ。別に俺は怨みを買った覚えはねえぞ」

俺は学園都市の中をひたすら走った。

「それに、あの力はなんだ。超能力でなければ一体・・・」

と考えていると、

「ちょこまかと逃げるなよ少年」

と男は小言で何かつぶやいた。

「ぐはあ」

（な、なんだ）

後ろから激痛がはしった。

「さて、鬼ごっこは終わりだ少年」

「くそ」

（体が動かない。このままだと殺られる）

俺は無意識に首から下げていた勾玉を握っていた。

「安心しろ、苦痛が無いように殺してやる」

（くそ、誰か助けてくれ）

謎の大男は手をかざし、散らばっている小石や空き缶などが集まり、

大きな塊ができた。

「さようなら」

と言い、俺に投げようとした瞬間、勾玉が光を発した。

「くっ」

「な、なんだ」

その光は俺を護るように包み込んだ。

「ん？何だここは」

そこは外と中を切り離したような空間だった。

『大丈夫？』

後ろから声がした。振り向くと、一人の少女がいた。

「ああ、大丈夫だ」

『よかった』

「ところでおまえは誰だ」

と質問をしたが、

『今はあまり時間がないから、その質問に答えない』

拒否された。

「そうか」

『じゃあ、手短に要件を伝えるよ。ゴホン、私はあなたの祖父に護るように頼まれたの』

「え、じいちゃんか？」

『うん。けど、私は戦える力がないの』

「じゃ、どうするんだ？」

『こつするの』

すると、彼女の手から勾玉が出された。

「これ、じいちゃんのじゃねえか」

『それを強く握って、目を閉じて』

「わかった」

強く握り、目を閉じた。

『ゴホン、我、汝に邪悪なる者を振り払う力を与えんとす』

彼女の声が低くなった。

すると、手から強い光を発し、徐々に弱まっていった。

『契約完了』

「え、契約？」

『そ。これで君の能力を開放されたの』

「俺の能力？」

といった時、空間が揺らぎ始めた。



『あ、もうそろそろ時間だ』

「ちよつと待て。俺の能力って何だ」

『あー、説明している時間がないから実戦でやろつか』

「ちよ、おまえな」

『文句を言つな。いくよ』

「俺の話を聞けーーーーー！」

目が覚め、そこには俺と大男がいた。

「さっきの光はなんだい」

「俺が聞きたいわ」

「さてと、茶番は止めて本気を出そうか」

と再び男は手をかざし、大きな塊を作った。

「はっ」

「うお、あぶねえ」

「まだまだたくさんあるぞ」

大男は連続投げつけた。

「たくつそんな物をポンポンポン町に放り投げるなよ」  
『全くだよね』

頭に彼女の声が響く

「おい、お前手伝ってくれよ」

『いやー手伝いたいのは山々何だけど、君の能力を開放したから魔力が不安定なのよ』

「魔力？なんだそら」

『まあ、細かいことは後々説明するから今は目の前に集中して』

「しょうがない」

「少年さつきから何ブツブツ言ってるんだ」

と言いながら大男はまた投げた。

「おい、その大男あまりそんな物を投げるなよ」

と言い、俺の頭に彼女の声が響いた。

『ふう、これならいけるかな。ねえ、君』

「なんだ」

『今から私の言うことをきいて』

「え、わっ分かった」

『今回は特別だからね』

と言いながら説明した。

『まず、手をまっすぐ伸ばして』

「こうか？」

と言われた通りにやると、刀が現れた。

「うお」

『おしゃ、成功した』

「おい、まさかこれで戦えと」

『そのまさかだよ』

（竹刀は持ったことはあるが、まさか刀が出てくるとは）

と俺はそう思いつつ、

「仕方ねえ、戦ってやるよ」

と俺は鞘から刃を出した。

「ふはははははははははは」

当然、大男大きな声をだした。

「まさかその貧弱の剣でオレの魔術を切ろうとでも」

「ああ。そのつもりだが」

「甘いな少年。オレの魔術はそう簡単に切れないのでね」

と余裕を見せる大男。

『大丈夫、その刀で切れるよ』

と声が響いた。

「さらばだ、少年」

と大男は塊を投げた。

「こうなったらヤケだ」

俺は無我夢中に塊を切った。

「そんな、あれは最高傑作だったのに」

大男はこの世終わりだと言う風な顔になりながら、後ろに下がる。

今がチャンスだと思い、俺は全力で走り、

「ぐはぁ」

大男にボディブローをかました。

「ふう、終わった」

『お疲れ〜』

「ありがとうな、お前のおかげで助かった」

『いやいや、そんなこともないこともないよ』

と聞き突然、俺に激痛が走った。

『あー、ちよつと無理させすぎたかな』

「ど、どういう事だ」

『まあ、簡単にいえば力の反動だね。一晩寝れば多分大丈夫だと思う』

「そうか、なら一刻も早く我が家にレッツゴーだな」

と大男を放置し、家に帰ることにした。

## 第二話　く覚醒く（後書き）

作「うあゝゝ」

響「おい、大丈夫か」

作「いやゝ、夏休みの課題が全然進んでないのよ。熱すぎて」  
響「そうか。ならそのまま干からびろ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7674m/>

---

とある魔術と刀鍛冶

2010年10月10日02時15分発行